

宇都宮で市民講座



シンポジウムで頭痛ケアについて解説する登壇者

宇都宮市内で15、16の両日、第26回日本臨床脳神経外科学会(大会長・藤井卓郎、脳神経外科病院長理事)が開かれた。市民公開講座「これまで進歩した頭痛治療、かけがえない日常を取り戻そう」では、県内外の医療関係者が最新の診療法や各自ができる対策などについて講演。「正しく診断し治療すれば、多くの頭痛は改善する。困ったら専門医に相談を」と呼びかけた。

(井上裕也)

仙台頭痛脳神経クリニック「頭痛」と他の疾患が原因のク(仙台市)の松森保彦院長「二次性頭痛」がある。日本長によると、頭痛は367人の40%が頭痛持ちであり、種類に分類され、検査で異片頭痛や緊張型頭痛などは常が見当たらない「二次性」「二次性頭痛」という。

頭痛薬物過多に注意

痛み止めや市販鎮痛薬は「月に10日以上使うと、薬剤の使用過多による頭痛(薬物乱用頭痛)につながる可能性がある」と指摘。「二次性頭痛」はくも膜下出血や脳腫瘍などの危険性があり「急に痛みが起きたら、72時間以上続いたりし場合などは注意が必要だ」と訴えた。

千船病院(大阪市)の産科と頭痛が発生するタイミング。皮下注射で投与する。獨協医大病院で使用した228人の内、1カ月後は36%が「治療前の月間頭痛日数が半分以下になった」と答えた。1年後、同様の回答は74%に上った。

副作用による治療中断は2人と、安全性の高さも特長という。

鈴木助教は「頭痛の軽減

化する。妊娠中に改善し、用や適量が判断される。出産後の再発も見られる。片頭痛のもととなる神経性炎症を引き起こす物質CGRP(カルシトニン遺伝子関連ペプチド)の働きを抑制する。発作を抑えるなどし、

女性の発症 要因を解説

受診、治療で多くが改善



頭痛診療の進歩について講演する獨協医大病院神経内科の鈴木紫布助教

婦人科・稲垣美恵子主任部長によると、片頭痛が多くなるのは20、40代の女性。女性ホルモンが関連し「CGRP製剤」を取り上げ、同製剤は頭痛診療に使用などで状態も複雑に変化する。関係する医師の診断の下、使

で家族への罪悪感がなくなると、外出への不安も解消された。患者の声を紹介。頭痛の日数を減らすこと、本来の自分を取り戻せると話した。

パネルディスカッションでは講演者や患者有志らが、病院の選り方や治療のポイントについて意見を交換した。獨協医大の平田幸一(副学長)は「まず頭痛専門医がいる施設を訪れてほしい。同大病院医療安全推進センターの辰元宗人教授は「いつもと違う」「新しい頭痛」がある場合は即座に受診を」と語った。

で家族への罪悪感がなくなると、外出への不安も解消された。患者の声を紹介。頭痛の日数を減らすこと、本来の自分を取り戻せると話した。

パネルディスカッションでは講演者や患者有志らが、病院の選り方や治療のポイントについて意見を交換した。獨協医大の平田幸一(副学長)は「まず頭痛専門医がいる施設を訪れてほしい。同大病院医療安全推進センターの辰元宗人教授は「いつもと違う」「新しい頭痛」がある場合は即座に受診を」と語った。